

OSS(戦略情報局) の全貌

～CIAの前身となった諜報機関の光と影

2 0 2 3 . 5 . 1 3

インテリジェンス研究所研究会

報告者 太田 茂

1 私はなぜOSSに関心を持ったか。「ゼロ戦特攻隊から刑事へ」の執筆が契機

- 主人公大館（おおだち）和夫氏は、元ゼロ戦特攻隊のパイロット。16歳で海軍予科練に入隊し、国内での厳しい訓練を経て、1944年10月、台湾に進出。台湾沖航空戦で初陣。
- まもなくフィリピン・クラークフィールド基地に移動。レイテ沖海戦に参加。シブヤン海での戦艦武蔵の撃沈をその日に知る。
- 初の特攻に成功した関行夫大尉の敷島隊の出撃を見送る。相前後して、大館氏も特攻隊を「志願」。
- 日本軍のフィリピン敗退後、氏らは台湾に帰還。沖縄戦に備える。1945年2月、氏らは、特攻用のゼロ戦を調達するため本土へ。調達後、鹿児島県笠之原基地で、明日台湾に帰還しようとしていたとき、「三笠宮の侍従」と称する高級武官が、氏らに「三笠宮」の上海への護衛飛行を依頼。翌日16機のゼロ戦で、「三笠宮」が搭乗する一式陸攻を護衛し、上海へ。しばらく滞在後、台湾に帰還。
- 以来、氏は台湾基地から7回特攻出撃するも、敵艦に遭遇せず。
8月15日、最後の特攻出撃寸前、天皇の「玉音放送」により出撃中止、奇跡的に生還。戦友の多くは特攻戦死。
- 戦後警視庁警察官となった氏は、亡くなった戦友たちへの鎮魂の思いに支えられ、名刑事として多くの難事件を解決。
- 少年時代から続けている剣道の修行。退官当日から地元の小学校での剣道指導を始め、30数年続けた。96歳の現在も、警視庁本部道場朝稽古会の最長老として、剣道を続けている。
- 氏は、戦後70年近く、自身の特攻体験を公に語らず。
- 剣道の縁を通じて、私と読売新聞記者の西嶋大美（ひろよし）氏に、氏の生涯記を公刊することを承諾。20数日、70時間以上の聴き取りを行い、史実を確認し、2016年に出版にこぎつけた。英語版「Memoirs of a kamikaze」はニューヨークタイムズで紹介されるなど世界的反響を呼んだ。

2 「三笠宮上海護衛飛行」の史実の確認

- ・ 公刊資料にまったく現れていない。ある人の10の供述の中で、重要な一つの実事について虚偽が含まれていれば、供述全体の信用性が疑われる検事の経験。 ※リアルな供述は「両刃の剣」
※「その人物が三笠宮であることが確認されるか、少なくとも大館氏らがそう思ったことは自然だったこと」
- ・ 2月26日、海軍侍従武官の今井秋次郎中佐が搭乗する一式陸攻を、鹿児島笠之原・鹿屋基地から、16機のゼロ戦が護衛して上海の基地に渡ったことは、正規の戦時日誌や宇垣纏「戦藻録」などで確認。しかし、一式陸攻に搭乗した「高貴な方」と大館氏らは直接対面せず。「三笠宮」であることは侍従武官の言葉のみ。
- ・ 大館氏らは、当時から不思議に感じていた。「こんな危険な時期になぜ宮様が上海に渡るのか？ 三笠宮は陸軍なのだから、なぜ陸軍が護衛しないのか？」など。
- ・ 三笠宮に宮内庁を通じてお尋ねのお便り。「当時のことは『思い出せない』との誠実なお返事をいただいた。私たちは、この飛行は真実だったと確信（その推論は「ゼロ戦特攻隊から刑事へ」の付記で詳述）。

＜その目的は、重慶蒋介石との和平工作のためではなかったか＞

それを調べるため、戦争末期に水面下で行われていた重慶との和平工作を研究。

- ・ 三笠宮は南京勤務で陸軍の墮落を痛感、「聖戦」の理想を失い「求めるものはただ和平のみとなった」。
※「支那事変に対する日本人としての内省」を公にし、陸軍からは危険人物視されていた。
- ・ 辻政信（毀誉褒貶が激しい）と共に南京で蒋介石の母親の慰霊祭を行った。
- ・ 当時、近衛文麿と実弟水谷川忠麿による何世禎工作、ブレーンの中山優による、燕京大学長レイトン・スチュアートの秘書傅涇波との工作、支那派遣総軍今井武夫による工作などが試みられていた。

3 繆斌工作（拙著「日中和平工作秘史」）

<唯一、天皇にまで上げられた工作>

その中で、唯一、最高戦争指導会議で激論され、天皇にまで上げられたのが繆斌（みょうひん）工作。南京政府の考試院副院長だった繆斌が、1945年3月に、蒋介石の使者として来日した。その和平条件案の骨子は、①南京政府を解消して重慶側中心の「留守府政権」を組織、②直ちに停戦と撤兵に関する日華双方の軍事代表による協定締結、③遅くとも2年以内に日本軍は撤退(ただし満州には一部を残す含み)であり、「連合国と歩調を合わせる」や「南京政府要人は日本政府において収容」なども含まれていた。

小磯首相と緒方情報局総裁が強く推進し（東久邇宮や石原莞爾も支援）、重光外相、米内海相、杉山陸相、木戸内大臣が激しく反対し、最後に天皇が工作中止の引導を渡した。

その真実性判断の鍵は、当時蒋介石が日本敗戦必至の状況の下で日本と和平する意思の有無にあった。

※ 蒋介石⇒戴笠⇒陳長風（顧敦吉）⇒蔣君輝（「扶桑七十年の夢」）・繆斌～～田村真作・山縣初男⇒緒方竹虎・東久邇宮⇒小磯國昭

<繆斌工作とOSSとの関係？>

横山鍬三氏（新民会で繆斌の部下だった）の「繆斌工作成らず」は執念の書。繆斌は、来日に際し「私の訪日中、東京空襲はありません。米軍は中国本土には上陸せず、沖縄から済州島、本土に上陸します」と断言。繆斌が来日した3月下旬の約2週間の間、繆斌の言葉どおり、それまでは連日激しかった東京空襲がほとんどなかった。

※東京には「機種不明の1機」が数回。神戸や名古屋では連日、70機～300機以上のB29など。

横山氏は、これを「繆斌が、中国のOSSのルートでその情報を得ていた」と推論。

その裏付けのため、OSSを調査する必要が生じた。

結論的には、繆斌のこの情報は、OSSから得たものではなく、ミルトン・マイルズから戴笠経由で伝えられたものと推論。マイルズは、1942年から約3年間、アメリカ海軍から中国に派遣され、蒋介石やその右腕の戴笠とともに、抗日のゲリラ・諜報作戦に従事した（「A Different Kind of War」）。

4 状況証拠による事実認定

検事としての捜査体験を通じた「状況証拠による事実認定」の手法で、繆斌工作の真実性を論証。

「ジグソーパズル」を組み立てるようなもの。パズルの一片を見ても何もわからないが、数百の片を置くべきところにおいていくと全体像が見事に浮かび上がってくる。

犯罪捜査では、犯人は、自己の犯罪を否認し、あるいは黙秘し、記録には一切残さないばかりか、証拠隠滅を行うことすらある。それでも、捜査官は、時には犯人に死刑を求刑することすらあり、それは状況証拠を総合した事実認定によらざるを得ない。

その状況証拠は、約400点の公刊資料を精査（拙著「日中和平工作秘史」「新考・近衛文麿論」末尾記載の文献資料リスト参照）。

- ※ いわゆる「オシント（Open Source Intelligence）」の手法に類似。
- ※ シギント（Signals Intelligence）
- ※ ヒューミント（Human Intelligence）

5 OSSの概要

(設立から解体への経緯)

「ワイルド・ビル」ことウィリアム・ジョセフ・ドノヴァン少将が、F・D・ルーズベルトの理解を得て、1941年7月に、陸海軍とは独立し、大統領に直属する情報機関COI（Coordinator of Information）を設立。1942年6月にOSS（Office of Strategic Services）に発展改組。当初約600人の組織が急激に成長し、最終的には、世界の大半の戦線に拠点を置き、非正規職員も含めて3万人にも及ぶ大組織となった。戦後の1945年9月20日、トルーマン大統領の命で解体されたが、その組織は1947年に設立されたCIAの前身となった。

※陸軍中野学校の卒業者は約2500名。登戸研究所(秘密装備・特殊武器)。「陸軍中野学校の光と影（S・マルカード、芙蓉書房）」
」(OSSの特色)

ドノヴァンの強烈な個性と指導力。膨大な予算。

職員は、右から左、共和党から民主党系まで極めて多様（Oh, So, Socialと揶揄された）

枢軸国に勝利するという目的のみを共有し、職員の思想や行動は良くも悪くも自由奔放

陸海軍や他の政府組織ではそれぞれが諜報機関をもっており、これらとの対立、軋轢が絶えなかった。

単なる情報収集や分析のみでなく、戦線におけるゲリラ工作、破壊工作の特務工作も活発に行った。女性工作員の活躍も、軍より顕著だった。

<主な部門>

SI (Secret Intelligence) 諜報局

SO(Special Operation) 特殊工作局

MO(Moral Operation) 士気工作局

R & A (Research and Analysis) 調査分析局

※組織と活動の重要な柱。アカデミズムの分野から歴史、経済、社会、外交、などの専門家を多数登用。左翼ないしリベラル系の力が強かった。「象徴天皇制の起源（加藤哲郎）」に詳しい。

6 OSSの功罪

(サンライズ作戦の成功 「謀略」の真髄)

OSSの最大の成功例。北イタリアで抗戦を続けていたドイツ軍を、1945年2月からの工作により、4月末に連合国に降伏させることに成功。これにより、北イタリアの歴史的都市の破壊や市民・兵士らの膨大な被害が免れ、イタリアの分裂や共産化が阻止された。

スイス支局長のアレン・ダレス（戦後第5代のCIA長官）が作戦の中心。右腕は実業家のゲーロ・フォン・ゲヴェールニッツ。ルイジ・バリリ男爵、マックス・フスマン教授、スイス軍のヴァイベル少佐らを通じて、北イタリアのドイツ軍でヒトラーに背いてでも早期の降伏を求めているカルル・ヴォルフ将軍（イタリア戦線のSS総司令官）らとの降伏交渉のルートを築いた。ヴォルフらは、降伏の真意があることの証に、3月8日、ドイツ軍に拘束されていたイタリア地下運動のバルチザン闘士二人を釈放（その一人フエリッチョ・パルリは、戦後初のイタリア首相となった）。※SSはナチス親衛隊
下交渉には、ダレスの右腕的存在だったポール・チャールズ・ブルームが活躍。ブルームは、戦後、初代のCIAの東京支局長となった（春名幹男「CIAの秘密ファイル」）。釈放直後、ヴォルフ将軍が側近らと共に、全員私服でチューリッヒに到着。ヴォルフは、ケッセルリングら北イタリアの司令官らの説得を約束。3月19日、スイスのアスコナで、ヴォルフ将軍と連合国のライマン・レムニッツァー将軍とテレンス・S・エアリー将軍が会談。両名は変装し、偽名で列車に乗り込んだ。ダレスらは、連合国の最終了解を得るのに様々な困難。ソ連の横やりも入った。ヴォルフらは、ヒトラーやヒムラー（SSのトップ）の弾圧との闘いだった。

秘密通信手段として、「リトル・ウオリー」の抜擢と活躍。彼は、26歳のチェコ人でダッハウの強制収容所収容の経験もあった。

※リトル・ウオリーは、ミラノにあるSSの対敵情報活動本部の最上階に無線連絡装置を持ち込み、ヴォルフ将軍側とダレス側との確実な通信手段を確保。

これらの作戦は「謀略の真髄」だった。後述する、繆斌工作などにおける日本の軍部政府の狭量さ、硬直さとは天地の差。

7-1

中国を混迷させたOSS

※「A Different Kind of War(ミルトン・E・マイルズ)」 「OSS in China(Maochun Yu)」

<マイルズの戦い>

マイルズは、海軍軍人。ワシントンで海軍軍備の充実や戦局情報収集分析を担当。

中国の在米大使館のHsiao 少佐と昵懇に。

日米戦開始後間もなく、アーネスト・キング提督から

「中国に行って、中国の沿岸に米軍が上陸する拠点を作れ。3、4年後には海軍が中国の沿岸部に上陸することになるだろう。日本軍を妨害することならなんでもやれ」と命令された。

Hsiao は、蔣介石と戴笠の直接の指揮を受けていた。戴は抗日テロでも恐れられていた特務機関「藍衣社」の首領。

Hsiao を通じて、マイルズの訪中を歓迎し、戴と連携して抗日戦を戦おうとの提案。

1942年5月、マイルズは重慶に到着。以降、終戦まで3年半の間、戴と強く連携したマイルズの抗日の戦いは「中国のアラビアのロレンス」とも評価される。ゲリラ・サボタージュ活動、アメリカの日本空襲を支援するための気象情報の把握・報告など。

SACO(Sino-American Cooperative Organization,中米合作社)を国家間の協定により設立（戴が長官、マイルズが次長）。

「冷酷なテロリスト」「中国のゲシュタポ」と批判され恐れられた戴笠の実像。知恵と機略、統率力に満ち、大胆で高い声望の優れた指揮官。 ⇒繆斌工作を指揮したのが戴笠。その真実性判断の考慮要素

当時、重慶の米大使館には、共産主義者ないしそのシンパで、国民党・蒋介石を批判し、延安共産党を礼賛する勢力が強かった（ジョン・サービス、ジョン・デービス、レイモンド・ルッデン、ジョン・エマーソンら。批判者から「4人のギャング」と呼ばれた）。彼らは、戴笠やマイルズを批判するプロパガンダをワシントンに送り続けた。国民党を支持するアメリカの対中政策に反し、延安の共産党を支援する活動が続けた。「共産党は、共産主義ではなく農業改革者だ、腐敗した国民党には戦後の中国の政権を委ねられない。戴笠は、冷酷なテロリストだ。」

7-2 OSS, ドノヴァンの中国進出の画策

陸軍は、蒋介石の総参謀長だったステイルウェル将軍が指揮。国務省・大使館以外のアメリカの組織もそれぞれ中国に情報機関を設けていた。他組織から批判されていたOSSが中国に進出するのは至難のことだった。ドノヴァンが目を付けたのがマイルズと戴との合作によるSACOのスキーム。協力姿勢を見せながら巧みにこれにOSSを入り込ませた。しかし、次第に衣の下から鎧を見せ始め、マイルズや戴の指揮権を排除してSACOの主導権を奪った。OSSの工作人員の中にも国民党より延安共産党を支持する勢力が強く、二人のジョンらと共に、延安への軍事支援を画策し、戴やマイルズを排斥した。OSSは、シェンノートの「フライングタイガース」の組織にも入り込んだ。

OSSは、共産党や共産主義に対する警戒心が乏しく、OSSが華北や満州にも進出するため、当初は共産党との協力連携に務めた。

しかし、戦争末期に至り、共産党はその本心を露わにし始め、OSSが華北に進出することに露骨な妨害・抵抗を始めた。ドノヴァンはその時期に至り、初めてOSSの対中政策の誤りを悟った。

ウェデマイヤー将軍は、ステイルウェルの後任となったが、当初、周辺の共産主義者らから洗脳され、マイルズや戴のSACOの活動を徹底的に弾圧した（「最も公正な第二次大戦史」と言われた「ウェデマイヤー回想録～第二次大戦に勝者なし」では、そのことに一言も触れていない。

中国でのOSSについて語る本では一様に、その状況を「Puzzle(不可解・謎)」だとしている。

1958年5月、マイルズは、ウィリアム・リーヒ提督と懇談。

「私はいったい中国で何が起こっていたのかまったく理解できない。カイロで、ルーズベルトは、蒋介石をあらゆる方法で支援すると約束したはずだ。彼は何度も『我々は中国を支援しようとしている』と語った。しかし、何かが、誰かが、彼と彼の計画の間に入り込んだ。我々は余りに忙しく、中国の支援と、障害の発見をする余裕がなかった。大統領は死ぬ間際まで私にそれを何度も語っていた。彼は、いったい何が起きているのか、我々はなぜ蒋介石を支援できていないのか知ろうとしていた。しかし、彼が死んでから、この問題は終わってしまった～トルーマンは、中国にはまったく関心がなかった」

8 - 1 インドシナでのOSSとイギリスSOEやフランスとの暗闘

<カール・アイフラーの活躍> 「This Grim and Savage Game(Tom Moon)」

「鉄人」の名にふさわしい素晴らしい武勇伝の持主。

元税関職員。ステイルウェルに能力を見出された。OSSに採用され、中国に派遣されようとしたが、ビルマ戦線に留まり、抗日のゲリラ戦を展開、大きな成果。

現地のカチン族の兵士らとの共闘。

※南北戦争当時の銃を大量入手

映画監督 ジョン・フォードの来訪

ステイルウェルと蒋介石の確執。ステイルウェルから、蒋介石の暗殺を指示される。アイフラーは本気になり、ワシントンに戻って様々な暗殺手段を考案。

「OSSのモーリアティ」ことスタンリー・ロベルの研究所。ほとんど007の世界。

※静かで光の出ない銃、寝室で爆発する蠟燭、ペンシル型の一回使用のピストル、死亡後の解剖でも原因

が分からない毒物など。ヤギの糞に似せ、オウム病菌と野ウサギ病菌、ペスト菌を混入。

しかし、細菌兵器の使用については、積極のロベルと、消極のドノヴァン、ルーズベルト

新たな任務として、ドイツの原爆科学者の誘拐計画。

最後の任務は、日本潜入作戦。その実行直前に、終戦となった。

8－2 インドシナを混迷させたOSSとイギリスSOE,フランスとの暗闘

OSSは、アメリカの政策が戦後の植民地解放にあったため、アジアの列強の植民地での独立運動の勢力と緊密に連携し、支援。

イギリス・フランスは、枢軸国に支配を奪われたアジアの植民地を戦後回復し維持しようとの強い意図。OSSの
作員と、イギリスのSOE（Special Operations Executive）との間で激しい対立があった。

※SOEは、MI-6から分かれて1940年にヒトラーに対抗するゲリラ運動の組織としてスタートした

中国・インド・ビルマ戦線を指揮するSEAC(※東南アジア統合司令部 South East Asia Command) の総司令官
だったイギリスのマウントバッテン将軍と副司令官のステイルウェルは対立。OSSの作員らは、SEACを「Save
England Asian Colonies」と批判。

明確な植民地維持の国益のために動くSOEと、枢軸国への勝利の目的以外には、思想的にバラバラで自由奔放な
OSSの作員との違い。

SOEは諜報機関としては後進者であるOSSを見下していた。

タイで反日地下組織「自由タイ」を率いる摂政プリーデー・パノムヨンや、ホーチミンが率いるベトナムの抗
日・独立運動組織ベトミンの運動をOSSは強力に支援。

戦争末期に至り、OSSとSOEやフランスとの対立は激化。仏印戦争の前哨戦となった。

9 ヨーロッパ戦線

SOEとOSSの摩擦、主導権争いは顕著。

連合国の北アフリカ上陸作戦（TORCH作戦）、イタリア上陸作戦、ノルマンディー上陸作戦などでは、OSSは大きな貢献。

スペイン上陸作戦の大失敗、ユーゴなど東欧での混乱(チトーに手玉に取られる)。

フランスでは、ドゴール派と反ドゴール派の対立による混乱。レジスタンス勢力では共和派から共産主義者まで勢力が乱立。パリ進軍でOSSの部隊はヘミングウェイと合流。

ドイツ支配地域に潜入するための007並みの特殊技術・作戦の活用。

※完璧なカバーストーリー。タバコの吸い方からテーブルマナーまで。ワインの大きな樽に作業員を潜ませてドイツ軍地域に潜入させたり、棺桶に銃器を詰め込んで偽の葬儀を行い、人々が大声で泣く中で埋葬し、夜になって掘り出して銃器を取り出して分配するなど。

女性作業員の素晴らしい活躍

※特に、情報の分析、プロパガンダなど。しかし、中には男性作業員を凌ぐ現地でのゲリラ破壊工作で活躍した人もいた（「Women of the OSS Sisters of Spies」）。

※ヴァージニア・ホール

片足を切断しながらエージェントとなり、フランスに潜入して農場で乳絞女として働きながら、諜報を行い落下傘降下部隊の支援、橋の爆破、線路の破壊、通信線切断などの破壊工作で活躍

10 CIAの前身となったOSS

ドノヴァンは、1944年11月、ルーズベルトに「戦後における諜報機関について」という構想メモを提出。 OSSを戦後もアメリカの統合的諜報機関として維持発展させようと考えた。

※このメモは、ドノヴァンの死の翌年、1960年に、建設中のCIA本部のビルでの追悼式で、アイゼンハワーとダレスが、建物隅の礎石に、埋め込む式典

これが漏洩され、NYタイムズなどが「汚い政治ゲーム」「独立予算の超スパイシステム」などと批判

ドノヴァンの宿敵だったエドガー・フーバーFBI長官らはOSSの消滅を画策

1945年9月、トルーマンにより解体。 トルーマンはOSSに冷たかった。※大戦中の様々な失敗 「平和時にはゲシュタポはいらない」戦後3週間で、R&Aの職員はほとんどいなくなり、多くが様々な大学などへ。

「彼らは、半分は警官と強盗、半分はフアカルティメンバーだった。OSSの人々は、道徳を捨て、あらゆる活動を行ったが、その希望は、民主主義のために戦って死ぬことだった。OSSの人々は自分たちの生死を駒にしたチェスゲームで戦った。その活動は彼らの記憶の中にある(トム・ムーン)」

しかし、トルーマンは、解体の誤りに気付く。中央情報機関はやはり必要。

1946年1月、CIG (Central Intelligence Group) が設立。多くの元OSS職員を採用。

次第に力をつけ、1947年7月、国家安全法に基づき、CIAと改称。大統領と国家安全委員会に直接報告。 秘密予算の運営。国内捜査はFBI、CIAは海外の諜報国策関係の権限の棲み分け。

CIAはOSSの残像。受け継いだ決定的なものは、秘密諜報工作 (SI) と秘密特殊作戦 (SO) を一つの組織のもとに統合CIAは、その活動に倫理性を問わないというOSSの伝統を受け継いだ

CIAは、朝鮮戦争における状況把握の悪さ、イランでモサッデクを排除し、パーレビ国王を担ぎ出したクーデターなどで厳しい批判を受けた

アレン・ダレス(5代長官)は、CIAの向上に大きく貢献。マッカーシズムの攻撃からCIAを守った。ダレスは、リベラルに寛容だった。

H・スミス（「OSS」の著者）

「CIAは、未だ反動的な妖怪にまでは至っていない。しかし、その組織が、その職員に対し、かつてのOSSの民主主義への反感を改めさせる決意をしない限り、CIAの現実は諜報社会においてOSSの悪しきイメージと一致することになる。OSSの精神は、その理想的な過去の回想にすぎなくなるだろう」

ダグラス・ウォーラー（「Wild Bill Donovan」）

「アレン・ダレスを始めとするOSSの幹部がCIAの最高幹部となった。失敗を恐れず大きな成果を生み出すというOSSの勇敢な精神はCIAに引き継がれた。しかし、法的・倫理的な問題は正義の実現のためには切り捨てられるという思考様式もCIAに影響を及ぼした。それにも関わらず、ドノヴァンは近代的戦争の在り方を形作った一人の人物だった」

1 1 OSSが日本に与えた影響

OSSは、戦時中から、天皇を象徴として維持する終戦後の対日政策を研究、それがGHQの占領政策につながる。「[象徴天皇制の起源（加藤哲郎）](#)」

OSSのフランクフルト学派（隠れマルクス主義）が、大戦中のアメリカの戦略として、戦後の日本を作り上げた。「[戦後日本を狂わせたOSS日本計画（田中英道）](#)」

ポール・ブルームが、CIAの初代東京支局長として、政財界、報道界、学界などに様々な影響力を行使。「[秘密のファイル（春名幹男）](#)」

（一点だけ感じること）

世界の戦線で活動したOSSは、枢軸国への勝利の目的だけは共有したが、その工作人員たちの思想は、右から左まで多様でバラバラであり、「OSS」とひとくくりに表現できない。

12-1 絶望的にお粗末だった日本の軍部・政府中央のインテリジェンス (繆斌工作を潰したのは軍部政府中央のインテリジェンスのお粗末さによる)

真実性判断の鍵は、当時、蒋介石が日本との和平を求めていたか否か？にある。

⇒蒋介石はカイロ宣言で架けられた梯子を、テヘラン会談、ヤルタ会談でルーズベルト、チャーチル、スターリンから外され、裏切られた。蒋介石は当時からそれを掴んでおり、戦後のソ連や共産党の中国支配を防ぐために日本との和平に舵を切った（拙著「日中和平工作秘史」）。

重光、米内らは、蒋介石は、カイロ宣言(1943) や連合国共同宣言(1942年、26か国、単独講和を禁じた) に縛られ、日本との和平の意思は全くないと思い込んでいた。

※広田弘毅の上奏「支那に対しては、如何なる方策を講じようとも、蒋介石は身動きできぬ情勢にあります」

多くの事実誤認に基づく官僚的発想で、「インネン」の類に近い反対意見

杉山「繆斌は肩書がない。蒋介石の委任状を持ってきていない」

重光・谷大使「繆斌は重慶の回し者、和平工作ブローカー」

天皇「南京政府の取り消しは国際信義に反する～三か月以内の撤兵など不可能」⇒全くの誤り

※南京政府の周仏海は、その存続に未練はなかった。撤兵方法は良く練り上げられ、武装解除せず、2年間で完了。満州には日本軍の一部を残す含み。

繆斌の無線通信技師を含む7人の訪日を拒否し、繆斌のみを来日させた（リトル・ウオーリーの受け入れとの落差）

12-2 東久邇宮の優れた見識

「中国では、一国と一国の和平交渉とか、同盟、連合とかにはいきなり国王が直接交渉することはない。はじめは布衣（ほい。下位の者が着る無紋の着物）の士が、内々に国王にたのまれたり、大臣にたのまれたりしてやる、そしていよいよ話がまとまったところで、はじめて、公式に談判が開始される～～これが中国の建前だと思う。特に、今日の日本と重慶とは戦争をしている。おまけに「相手にせず」といっているときに、どう考えても重慶から正式の使者が来るわけがないではないか。第一に、蒋介石氏の立場として、委任状を日本に持たせてよこす～と考えることすら誤りである。委任状なく、地位もないところがかえって面白い。信用が出来るとか、出来ぬとかいうが、よしんば詐な（だま）されてもよいではないか」

※「やんちゃな宮様」と呼ばれた。フランスに留学し、自由な思想を学ぶ。クレマンソーの教え「日本は絶対にアメリカと戦争してはならない」を肝に銘じ、近衛の日米諒解案交渉を後押ししたり、日中戦争の停戦、重慶との和平工作に力を注いだ。

12－3 「阿片王」里見甫は、重要な情報を掴んでいた

東久邇宮日記の1944年2月2日の欄に興味深い記載。

「若松華瑤、里見甫来たる。里見は永く上海にいて支那人の知人多く、一日本人として陸軍の意をうけて、重慶政府との和平交渉の第一歩をふみ出しつつある。里見は次のように話した。『蒋介石はカイロ会談でルーズベルト、チャーチルと会談して大いに得意になっていたが、テヘラン会談では、スターリンが蔣の出席を好まずとの理由で、ルーズベルトから出席を断られた。その後になって、実はルーズベルトが蔣の出席を好まなかったことが判り、ウソをついたとって、蔣は米国に対して大いに不満をもった。それから、蔣は日本との和平に心が動きつつある。蔣の基本条件は、日本が重慶政府を中華民国の正式政府と認めて和平交渉をすべしというにある』」

里見は、里見機関を作って中国でアヘンの取引をしていたことで悪名が高い。しかし、政府や軍部の為政者よりも、中国社会に深く潜り込んだ里見のような人物の方が、このような連合国内での蒋介石とルーズベルトやスターリンとの対立関係の情報を正しくつかんでいた（佐野真一の「『阿片王 満州の夜と霧』」

上海に居ながら、テロに遭わず。阿片の利益を日本軍のみでなく、国民党軍、共産軍にまで広く渡していた。幅広い人脈。リベラルの松本重治は「天馬空を駆けるような魅力」と回想。

一切私腹を肥やさなかった。「児玉君や笹川君はいかなあ、僕はあんなことはできんよ」。

死んだとき、遺児の学資すら残っていなかった。政財界の大物や右から左の人物まで多数の人々が遺児の育英資金を募った。

（推測）蒋介石の右腕、青幫の首領杜月笙とのつながり？ 杜は重慶の和平工作担当の一人

1 3 蒋介石の優れた人物把握 ～中国人は組織よりも「人」を観る～組織・肩書本位の日本との違い

1944年秋ころから、蒋介石は心ある日本の人々に、密かに和平のシグナルを送っていた。

<岡村寧次>

「殺すな、焼くな、犯すな」の三戒。蒋介石の以德報怨への恩義から、「白団」を組織して蒋介石の台湾防衛を支援

「こっちはカイロ会談も知らなければ、国内が痛んでいるのも知らないから、（蒋介石は）実に生意気なことを言うと思っておったですよ。ところが、向こうは日本を負けさせたあとのことまで決めちゃっているんだから、非常に親切な言葉なんです。～戦後わかりましたけどね。その時はまるでピントが合わないんですね。私と重慶とは。～向こうはどうかして日本をあんまり痛めないうちに、戦いをやめさせなければと考えていたんですね。私なんぞ何も知らずに、アメリカの方のけん制のために、一ぺん重慶大侵攻作戦をやろうとしていた。実際ものを知らざるものはなはだしいものだ、あとで思いましたがね。～バカだったと後悔しますよ。何も知らずに～」

と正直な述懐（中村菊男『昭和陸軍秘史』）。※重光の傲岸さとは対照的

<安江仙弘大佐>

樋口季一郎と共に、満州に逃れてきたユダヤ人を救済「大連特務機関と幻のユダヤ国家(安江弘夫)」

<吉田東祐>

野人ながら重慶との和平に心血を注いだ（「二つの国にかける橋」）

<今井武夫>

陸軍にありながら、重慶との和平工作に腐心

<近衛文麿>

蒋介石は近衛の政治能力を批判しつつ、天皇に通じる要路だと考えていた。

1 4 近衛文麿の和平工作を妨害

盧溝橋事件発生直後、拡大阻止のため、上海に派遣しようとした宮崎龍介を憲兵隊は拘束して妨害。

支那派遣総軍の佐藤賢了と今井武夫は、近衛の実弟水谷川忠麿らによる重慶との「何世禎工作」を妨害。1944年秋から1945年1月末までに試みられた。国民党の情報機関「国際問題研究所」の上海の責任者何世禎らから、①前線での停戦、②天皇の親政、③戦争責任者の処罰を実行してから和平条件を交渉するとの申し入れ。水谷川が兄の文麿や、重光外相に強く推進を訴えた(※周仏海日記にも、周がこの情報を側聞していた記載がある)。

重光は乗り気でなく、水谷川が1月末に、南京で、佐藤賢了や今井武夫に推進協力を求めたが、断られ、水谷川は、拘束される危機となり、やむなく帰国して水泡に帰した。

※児玉誉志夫「我敗れたり」

「天皇は重慶にある蒋介石主席に和平を申し出ることを決意された。天皇の命によって近衛前首相の弟にあたる宮川(※水谷川のこと)忠麿氏は昭和19年の夏ひそかに上海にわたり、上海の国際問題研究所(重慶側情報機関)の責任者である何世禎氏を通じ、天皇の意志として天皇は戦争の絶望なることを知って一日も早く戦争の終結を希望するものである。日本側が誠意を示すため、まず、日本の責任者である東條内閣を罷免し(※ここは誤り)、その後任内閣によって和平条件を履行せしめるという申し入れを行った～しかし、この工作は、蒋介石の側近で共産党の同情者である王芃生が、これを妨害する ため日本派遣軍総司令部に密告し、憤激した派遣軍が忠麿らの逮捕に向かったが、忠麿らは辛くも 逃れて日本に戻った」

※「天皇」関係はやや筆が走り過ぎ？

※ 今井武夫の功罪

盧溝橋事件の拡大防止や重慶との和平工作(桐工作など)に心血を注いだ、良心的陸軍軍人。しかし惜しむらくは、真剣さの余り、自分以外のルートによる和平工作を嫌悪し、妨害した。今井は、自分の対重慶工作が行き詰り、6月ころになって、何世禎工作の復活を求めたが、時すでに遅かった。

15 スウェーデン、スイス、バチカンでの工作を軍部・政府の中央は黙殺

＜元スウェーデン駐日公使のバッゲ工作＞ ※重光外相が東郷外傷に引き継がず

＜優れたインテリジェンスオフィサー小野寺信のスウェーデン王室による和平仲介工作＞ ※岡本公使による激しい小野寺批判

＜駐スイス海軍武官藤村義朗中佐による工作＞ ⇒海軍中央が黙殺

＜バーゼルの国際決済銀行（BIS）理事北村孝治郎と同行為替部長吉村侃、陸軍の岡本清福中将や加瀬俊一（しゅんいち）公

使らによる工作 ⇒陸軍中央が黙殺

＜バチカンルートでの工作＞ ⇒外務本省が黙殺

これらの工作をアメリカ側で担い、指揮していたのはOSSのダレスやゲヴェールニッツだった。

ダレスは、「静かなる降伏」で次の回想。

「われわれがサンライズ作戦にとりかかっている間にも、この作戦のうわさがスイスの日本代表部に達していた。1945年4月ゲヴェールニッツと私は、スイスで日本の陸海軍のスポークスマン、バーゼルの国際銀行の日本人役員から接触を受けた。彼らは日本の和平を確立するために、サンライズ作戦のためにつくられたワシントンとの秘密チャンネルを使ってくれるかどうか打診してきたのであった。私はワシントンに報告し、日本側の言い分を聞く権限を与えられた。国際決済銀行の有能なスウェーデン人の経済顧問であるベル・ヤコブソンもこの話し合いに加わりワシントンとベルンの間では活発な意見が交換された。1945年7月20日、ワシントンからの指令の下に、私はポツダム会談におもむき、私が東京で知り得たこと、もしも天皇と憲法を保持することができ、それが降伏という破滅的なニュースが伝えられた後でも日本に規律と秩序を保つ基盤となり得るなら、降伏したいと望んでいること～をステイムソン陸軍長官に伝えた。この頃までには北イタリア軍降伏のニュースと、それがどのようにしてもたらされたかという次第が広く公表されていて、その効果は拡がる一方だった。残念なことに日本のケースは、われわれにとって時間切れになった。われわれの方に和平への確実な道があり、彼らが交渉しているアメリカ人がワシントンの最高権力筋と直接の連絡を持って居る、ということに東京の政府が確信を抱く前に、モスクワが仲介者として現れ、日本政府はソ連を通じて和平を求めることに決した。～もし、この交渉チャンネルを発展させるもう少し時間を与えられていたとしたら、日本の降伏の事情はもう少しちがってものになっていたかもしれない」

(当時の外務次官の発言)

「例のアレンダレス辺りのはね、あんなもの無意味ですから～～僕らは情報を持っていたけど、そんなものは相手にしたくもない～～謀略だ
と思うよ」

最も和平を必要としていた日本の方が、軍部政府がその可能性を潰し、戦後構想まで含めて戦争早期終結を考えていたアメリカの方が、和平
工作を真剣に進めていた。

(「謀略」には二つの意味)

- ① 和平の意思はないのに、敵の攻撃の矛先を交わす攪乱、敵方の情報収集目的
- ② 和平の真意はあるが、正規の外交交渉のルートに乗せるには状況がまだ熟さないため、水面下で、外交ルートのバックチャンネルとして、
和平に導くためのお膳立てを行うもの(サンライズ作戦がその典型例)

※軍部や政府の中央にはこの区別が乏しかった。

(ソ連に和平仲介を依頼した絶望的な誤り)

※拙著「新考・近衛文麿論」中の「海軍と陸軍の和平の対応と責任論」で詳述) (共産主義、ソ連に傾斜していた陸軍や海軍)

高木惣吉海軍少将の功罪

米内光政、井上成美の功罪

阿南惟幾は、重慶蒋介石との早期和平を念願していた

(蒋介石の優れたインテリジェンスとの落差)

鹿錫俊教授の蒋介石日記研究 ※現在1941年までの分析が公刊

ヨーロッパ戦開始後も、慎重な見極め。 「バスに乗り遅れるな」の日本との落差

独ソ戦開始を予見。

日中戦争の「国際的解決」への道を作る。

戦況の進展に応じた、日本との和平への道の模索。

1 6 その原因は何か

(日清日露戦争の勝利が「悪しき成功体験」となった)

日露戦争におけるインテリジェンスの素晴らしさ

※明石元二郎、金子堅太郎、高橋是清

(陸海軍教育の「成績主義」 組織論・官僚的発想)

1945年1月26日、阿南が東久邇宮に語った。

「根本的には、士官学校、陸軍大学の戦術教育が間違っていたのである。教官の質問に対し、適当な解答をしたものが優秀な成績を得るようだったが、これは常に受身に立つ習慣をつくり、自発的、積極的に立つ教育を受けていなかったのも、実敵に直面する時、つねに後手後手となり、敵の後塵を拝することとなり易い。また、学術の研究に走り、精神的鍛練を欠き、才子的頭脳の鋭敏なものが成績優秀とされ、精神的要素があまりにも顧みられなかった。これらの将校が、陸軍中央部の枢要な地位を占めていたことが、今日戦況不振の根本原因となったのである」

(ポーツマス条約受諾問題以来の「ポピュリズム」)

(外務省の中の二つの傾向)

終戦工作にかかわっていた当時の外務次官の発言

「(軍人)が世界の大勢わかりますか。～外務省は敵方の情報も全部知っているんですからね。裏も表も。それを知らないのは陸海軍ですよ。～外務省が敵方の放送も全部聞いているんです。日本の今の戦争の何がどうなっているか、皆知っていますよね。外務省は」

他方、良心的で正確に認識していた外交官も少なくなかった。三国同盟に反対、ドイツの妄信への警鐘、ソ連への和平工作仲介依頼への反対など。スウェーデンの岡本行使は、小野寺工作を妨害したが、ポツダム受諾宣言受諾の方向性を導く貴重な情報や意見を送っていた。

(作戦部門の優位と情報部門の劣後性) ※「」部分は小谷賢「日本軍のインテリジェンス」より

「太平洋戦争の緒戦を見る限り、陸海軍ともよく相手を研究していた～～しかし、陸海軍のインテリジェンス能力は軍事情報の分野や作戦計画に対応することはできたが、総力戦や大戦略のレベルになると対応しきれなくなった。なぜなら、そのような情報分析には、経済・産業情報や、相手の文化といったトータルな観点からの視点が必要であり、そのような分析スタッフは当時絶対的に不足していたからである」

「当時の日本軍の組織的特性としては、優秀な人間を集めた作戦部にすべての情報が集まりそれを分析する。すなわち作戦と情報が同じ所で行われるような仕組みになっていた。この仕組みであると～～作戦や戦略のためにどのような情報や分析が必要なのか、という情報のニーズをすぐに作戦へと反映することはできるが、その反面、複雑な情報分析、評価を必要とする中長期的なインテリジェンス運用には向いていない。このようなシステムのため、日本軍は短期的な作戦レベルの情報運用には秀でていた。しかし、欠点としては、作戦・政策の役に立たない大局的情報や、将来役に立つかもしれないような情報は無視されてしまう。本来、客観的な情勢判断のためにはあらゆる情報を、それがどんなに些細なものであってもそれを検討し、インテリジェンスに組み込んでいくべきなのであるが、作戦部が情報分析を行うと、いかに作戦に寄与するかという極めて短期的かつ主観的な態度で情報が取捨選択され、～～～その結果中長期的な戦略情報に基づいた情勢 判断ができなくなってしまう～～」

「それらの原因として、作戦部門の情報部門に対する優越と軽視、情報部門の体勢の弱さや人材の絶対的不足、軍部内はもとより、外務省など他の組織との間でも情報の共有や集約がまったく行われていなかったこと」

軍事作戦であれば、計画や遂行に軍人以外の者が関与することは基本的にない。作戦のための情報源も限定されがちで、作戦遂行に役立つ正確な「インフォメーション」が得られれば基本的に足りる。しかし、和平工作には、より高く深いレベルでの「インテリジェンス」が重要不可欠。敵国側に日本との和平の意思があるか、その条件はどのようなものか、和平交渉の窓口やルートとしてはどれが適切か、どの段階でどのような働きかけをしていくべきか、などについて、少しでも役立つ情報を広く深く収集し、分析検討することが必要となる。そのためには、相手国の歴史や文化、国際情勢、政治外交関係の現状や変化の状況などについて、参考となる情報をくまなく収集して分析しなければならない。蒋介石に、当時、日本と和平の意思があったか否か、単独講和を許さない連合国共同宣言の下で、中国との和平を突破口としてどのようにアメリカなど連合国との和平に導いていくことができるかの判断・検討には、このような意味での最高度のインテリジェンスが必要だった。

1 7 歴史研究における専門的研究者と素人研究者

(専門的研究者の長所と限界)

ある領域、テーマについての資料研究の深さや緻密さは、素人研究者は到底及ばない。

他方、専門領域の限界やマイナス面もある。

具体的資料の裏付けのない事実について「推論」を述べることは慎重・抑制的。

⇒資料が残存せず、当事者も具体的に語らない事実について歴史の空白を埋めることが困難

素人研究を軽視する傾向

(素人研究者の長所と限界)

専門領域にとらわれない幅広い視点からの研究ができる。

大胆で自由、柔軟な発想が可能。

他方、読者をミスリードするような危うい論述や主張の危険もはらむ。※情報の「非対称性」

(専門的研究者と素人研究者の協働・シナジー効果の発揮が期待される)

※裁判員裁判の経験

1 8 繆斌工作について

蒋介石は、「蒋介石秘録」で、「日本の焦りを示す茶番だった」とその真実性を否認。

しかし、これは、蒋介石が「墓場まで持っていくしかない事実だったと推認。

※共産党と国民党はそれぞれが、裏で日本軍と通じながら相互に相手方の日本との接触を非難し合う「ねじれた対立関係」にあった。

東京裁判における共産党側からの批判攻撃の恐れ。1946年3月1日、戴笠が飛行機墜落事故で死亡し繆斌は後ろ盾を失った。※東京裁判での小磯國昭の弁護人を務めた三文字正平の回想記事

繆斌は、戦後「漢奸」として逮捕・起訴され、死刑となった。しかし、戴笠の死亡までは、蒋介石から褒賞され、上海の公館で悠々と暮らしていた。

日本が侵略した中国の人でありながら、一貫して日本との連携、和平のために心血を注いだ。日本はその人徳と功績を忘れるべきではない。中央区の鉄砲洲稻荷神社に、その慰霊碑がある。

（おわりに～～私の問題意識と期待）

- ・ 繆斌工作の真実性について、決定的な証拠資料が欲しい。

※フーバー研究所の蒋介石日記（ただ、直接的記載はない？）

- ・ 戴笠についての研究を期待

- ・ 頭山満と玄洋社、黒龍会について、米英では、いまだにハーバード・ノーマン（当時最高のジャパノロジストで、カナダの外交官。GHOの調査分析課長。共産主義者だと攻撃され、投身自殺）の著しい誤解によるGHQの認識が残っている。その是正に微力を尽くしたい。

※頭山は、日清・日露戦争では断固開戦を主張したが、近衛篤磨と大アジア主義を共有し、孫文の辛亥革命を支援した。将来、蒋介石・国民党が力をつければ、満州は中国の領土としてよいと考え、満州事変や満州国の建国には反対だった。日中戦争に反対し、近衛文磨や東久邇宮を支援して、日中の和平に心血を注いだ。

※頭山は「思想には寛容」だった。

(私の疑問) 戦争末期に、日本の陸海軍がどうしてそこまで親共産主義的になったのか？

- ・アメリカでは、戦後、議会などで徹底的に追及された。ルーズベルトの周囲の共産主義者らが対中国、ソ連政策に大きな影響を与えた。

「スターリンは自国の安全を求めているだけだ～～彼はノブレス・オブリージュとして、どこの国も併合しようとせず世界の民主主義と平和のために働くだろう～～共産主義がわが国にとって危険なものであるとは考えていない～～ロシアはわが国が最も頼れる同盟国になるであろう(ルーズベルト)」

- ・木戸幸一は、1945年3月3日、友人の宗像久敬に語った。

「ソ連に頼って和平を行えば、ソ連は共産主義者の入閣を求めてくるのであろうが、それは受け入れてもよい～～共産主義というが、今日はそれほど恐ろしいものではないぞ。世界中が皆共産主義ではないか。欧州も然り、支那も然り、残るは我が国位のものではないか」

- ・海軍 鈴木貫太郎「スターリンは西郷隆盛のような人のようだから悪いようにはしないだろう」

米内、井上成美、高木惣吉の和平工作は対ソ、対延安一辺倒だった。

1945.2井上発言 「終戦の一つの方法は海軍が中支那を明け渡すことだ。そこに中共軍は入ってくる。アメリカの太平洋作戦の目標は日本を取ることよりも中国市場を手に入れることだ。ところが中支那が中共の勢力に入ればアメリカは戦争目標を失うことになる。北支那は陸軍が明け渡しそうにないから、海軍の地盤を明け渡せば終戦への近道になる」

高木が6月28日作成した「時局収集対策」 「蒙古、新疆、西藏ニ対スル蘇勢力進出ノ承認、西亜及ビ印度ニ対スル蘇勢力進出ノ承認、北鉄及北満戦略鉄道ノ譲渡、東亜新秩序協定ノ形ヲ以テスル満支ニ対スル蘇勢力進出ノ承認、関東州租借権ノ移譲、満州及北支ニ対スル蘇（或ハ延安政権）ノ特殊地位ノ承認」。高木は、重慶工作を中止させた。

陸軍 陸相秘書官の松谷誠大佐 「スターリンは～人情の機微に即せる左翼運動の正道に立っており、～ソ連は我が国に国体を破壊し、赤化せんとする如きは考えないであろう～～ソ連の民族政策は寛容のものでありスラブ民族は人種的偏見が少なく、民族の自決と固有文化を尊重し～ソ連は我が国体と赤は絶対に相容ざるものとは考えないだろう」

⇒ 尾崎・ゾルゲは1941年秋に逮捕、1944年11月に処刑。一体、誰がこのような考えを吹き込んだのか？ ソ連や共産主義に対するアメリカと日本の国家指導者の戦争末期の状況は、「相似形」のようだ。尾崎ゾルゲ事件以外に、まだ未解明のことが少なくないのではないか？

(著書)

「ゼロ戦特攻隊から刑事へ」(西嶋大美氏との共著)

初版 2016 芙蓉書房出版

増補新版 2022

「Memoirs of a Kamikaze」 前書の英語版 (関西大学教授アレックス・ベネット氏との共訳)

Tuttle.co.jp 2020

※ウェブサイト「Logbook project」参照

「OSS(戦略情報局)の全貌～CIAの前身となった諜報機関の光と影」

2022 芙蓉書房出版

「日中和平工作秘史～繆斌工作は真実だった」

2022 芙蓉書房出版

「新考・近衛文麿論～「悲劇の宰相、最後の公家」の戦争責任と和平工作」

2022 芙蓉書房出版

「実践刑事証拠法」 2017 成文堂

「応用刑事訴訟法」 2017 成文堂

「刑事法入門」 2017 成文堂(初版) 2023 改訂版

(主要論文)

搜索差押の特定性の要求に関するアメリカ合衆国連邦裁判所判例の諸法理とその実情

2015 早稲田大学比較法研究所